

庭園

庭園の原型は、高僧であり、庭づくりの名手でもあった夢窓国師の手によって、1339年に作られた。現在は庭園全体を120種以上の苔が覆っていることから「苔寺」としても親しまれているが、苔の繁茂が盛んになったのは200年前ごろからで、庭園が出来た当初は、苔ではなく、白砂・青松の景観を呈し、桜の名所でもあった。

庭園は、上下二段に分かれており、下段は黄金池を中心にした池泉回遊式庭園、上段は枯山水式庭園、になっている。庭園は史跡・特別名勝に指定されている。

下段の庭の中心景となる黄金池は、西芳寺庭園の本池であり、形は漢字の「心」を象っており、別名心字池とも呼ばれている。参拝者は庭園を散策する中で、この池の周りを回することで、心と体を清めることが出来るとされている。尚、下段の庭の中には、3つのお茶室がある。

下段の緩やかな起伏の小道は、向上関を抜けると急なつづら折りの道へと変わって変わる。この道は通宵路と呼ばれており、僧侶が悟りを求める修行の際に登った険しい山道を彷彿とさせる。上段の庭は下段の庭よりも厳かな雰囲気である。実際、この険しい道や、岩や石組みの圧倒的な存在感は、禅宗の精神性を表現するためにつくられたものであり、つくられた当時は革命的で斬新なものであった。上段の中ほどにある枯山水は、世界最古のものであり、これも夢窓国師がつくったものである。